

文明の地球システム論的分析

Civilization, Homosapiens and Earth system

松井 孝典[1]

Takafumi Matsui[1]

[1] 東大・院・新領域

[1] Grad. Sch. of Frontier Sci., Univ. of Tokyo

現在我々は、地球環境問題を初めとし、資源・エネルギー問題、食糧問題、人口問題など、文明に内在する様々な問題を抱えている。それはある意味で、過去の文明が直面し、その結果滅亡した問題と共通するものもあるが、過去のそれと決定的に異なる点も多い。本講演では文明を、地球システム論的に分析し、その現状と未来について考察する。

文明とは何か？ 狩猟採集と農耕牧畜という生き方を、地球システム論的に分析すると、前者は生物圏の物質循環の中に閉じた生き方、後者は地球システムの物質循環、エネルギーの流れを利用する生き方、と考えることができる。地球システムを、ボックスモデルとして表現すれば、農耕牧畜により、生物圏から人間圏とでも呼ぶべき物質圏が分化し、地球システムに人間圏という新たな構成要素が誕生した、と考えることができる。すなわち、文明とは、地球システムの中に人間圏という構成要素を作って生きる生き方、と定義することができる。

では文明の問題とは何か？ それは、地球システムと、その構成要素である人間圏との、関係性の問題である。その関係性は、具体的には我々が、人間圏の内部構造、内部システムをどのように設計するか、によっている。最終的には、問題は、現生人類が何故そのような生き方を選択したか、という問題にゆきつく。

最近の人類学的知見と、脳における情報処理の理解に基づけば、それは、おばあさん仮説と、脳における外的世界の内部モデル化、に関係する。おばあさんの誕生は、現生人類に人口増加という問題を生じさせ、それに伴い我々は、今に至っても超克できない、右肩上がりという共同幻想を抱くようになった。

本講演では以上のような認識について紹介し、人間圏の現状と未来について論じる。文明の未来は結局、我々とは何か、そのレゾナードルとは何か、我々が将来いかなる共同幻想を抱きうるか、によっている。